＊受賞インタビュー＊

本年度の「第10回中経フロンティア賞」に中部ＥＥＮ（本社名古屋市昭和区福江）、また、「第24回中経トパーズ賞」には、鈴木康代さん（教育企画取締役、本社名古屋市西区名駅）と宇野恵利子さん（羽島企画トータルケアＭａｍａ，ｓ社長、本社羽島市小熊町島）の２人が選ばれ、４日に表彰式が行われた。中経フロンティア賞は、新しい視点で事業に取り組み、新規市場を開拓した企業を顕彰。一方の中経トパーズ賞は、優れた経営手腕を発揮するとともに、地域での団体活動などにも積極的に取り組んでいる女性経営者を表彰している。今回受賞された３人に、喜びの声と今後の目標などについて聞いた。（１面参照）

■第10回中経フロンティア賞

デジタル画像処理で構造物点検

中部ＥＥＮ社長　衣笠　貢司氏
（きぬがさ・こうじ）

「日本各地にシステムを普及させたい」と話す衣笠社長

―受賞おめでとうございます。

「ありがとうございます。57歳で地元のゼネコンを退職し、2011年2月に創業しました。将来、エネルギー問題やインフラ整備が非常に重要になるとの思いで事業を始めました。その後、東日本大震災の発生、高速道路でのトンネル天井板落下事故があり、事業が時代のニーズに合いました」

―デジタル画像処理による構造物の点検調査・解析システムは、どのようなものですか。

「橋やトンネル、建物、工場など、構造物の長寿命化には、定期的なひび割れなどの劣化診断が必要です。放置すると漏水や錆（さび）の原因となり、修復費用がかさみます。当社のシステムは、デジタルカメラで撮影した画像を、独自の処理技術で、ひび割れの幅や長さ、面積を計測します。メリットは、従来の目視と手書きによる点検に比べ、現場での調査時間を短縮できるほか、診断精度の向上（0・1㍉けの測定が可能）、熟練者に頼らず担当者が変更しても解析レベルにばらつきがない、などが挙げられます。また、解析結果はデータ保存するため、315年後といった経年観察にも活用できます」

―作業者の負担軽減にもつながりそうですね。

「例えば、トンネル内部を点検する場合、現在は作業者が上を向くケースも多く、首や体に負担がかかります。当社のシステムは、現場での主な作業は撮影のみです。実際の診断業務は事務所など屋内で行うため、高齢者や女性の活躍の場も広がっていくことも重要だと考えています」

―4月から、名古屋商工会議所の女性会会長も務めていらっしゃいます。

「会員増強とともに、2016年3月に開催する女性会50周年記念式典の企画に取り組んでいます。重責ですが、自分の成長の糧にもなると思い、会議所の方々と相談しながら取り組んでいます」

―今後の抱負を。

「大きな目標はありません。今まで通り、任された仕事を途中で投げ出さず着実にやっていくだけです。逃げるのは嫌いですので、仕事は必ずやり遂げたいと考えています」

負担軽減し高齢者にも活躍の場

―点検対象の構造物はどのようなものでしょうか。

「老朽化した橋やトンネルのほか、民間の建物、工場など幅広いです。今後は新築の構造物でも初期点検が増えるとみており、点検ニーズはより一層高まると予想しています」

―国や大手企業などから技術が評価されていますね。

「システムに使う基本ソフトは、国土交通省が整備する、有用な新技術を提供するデータベースに登録されています。取引先では、ＪＲ東海や中日本高速道路のグループ会社など、お客さまに恵まれています」

―将来像を教えてください。

「日本各地でシステムを普及させたいです。当社単独で診断するだけでなく、システムのレンタルも行っています。その収入やメンテナンスフィーなどをもとに、さらなる開発を進めていきます」

■第24回中経トパーズ賞

魅力ある授業通じ勝ち残り

教育企画取締役　鈴木　康代さん
（すずき・やすよ）

「任された仕事はどんなことがあってもやり遂げたい」と語る鈴木さん

―受賞おめでとうございます。

「ありがとうございます。中経トパーズ賞は24年の歴史があると聞いています。早くから女性の活躍に焦点をあてていた賞を受賞でき光栄です」

―教育企画設立の翌年に入社されています。

「大手生命保険会社から転職し、1986年に入社しました。当社が運営する進学塾『名進研』の立ち上げからかかわっています。若い会社ゆえ、自分の意見が受け入れられることも多かったと記憶しています」

―これまでどんなことに取り組んできましたか。

「15年ほど前に、幼稚園事業の立ち上げと運営に携わりました。『卒業記念コンサート』の開催にもかかわりました。ただ私は、自分から何かを発案したり、道を切り開いていくタイプではないです。任された仕事を行っていく過程でノウハウを身につけ、次の仕事につなげていった、と思っています」

―顧客が多い業界で成長を続けてきた原因は何でしょう。

「業界は、本来お客さまである生徒と保護者よりも、講師の立場が強い世界でした。そうした状況の中で、当社のように生徒や保護者が何を求めているのかを常に意識していたことも重要だと考えています」

―4月から、名古屋商工会議所の女性会会長も務めていらっしゃいます。

「中学受験に関する情報が欲しいという保護者からの要望に応え、名古屋では初めて私立中学校の学校説明会を開催しました。また、大みそかから正月三が日にかけて泊まり込みで勉強する『正月特訓』も、東海地区で初めて行いました。新しい取り組みに挑戦し続けてきたことも、大きいと思います」

―少子化が進んでいます。対策を教えてください。

「魅力ある授業を行い、名進研に通うことにメリットを感じてもらえれば、勝ち残れるのではないでしょうか。保護者が求める情報を発信し続けていくことも重要だと考えています」

「名進研」立ち上げから参画

羽島企画トータルケアMama，s社長　宇野　恵利子さん
（うの・えりこ）

「女性の目線と経験を生かしたサービスが評価された」と話す宇野さん

―受賞おめでとうございます。

「普通の女性が地域のために何かできないかとやってきただけで、このような賞をいただいてよいものかと戸惑いもあります。これも一緒になって努力してきてくれたスタッフや指導していただいた専門職のガク々の力添えがあったからと感謝しております」

―あらためて創業の経緯からうかがいます。

「最初から独立して起業しようとかは思ってもいませんでした。保育士になって結婚しましたが、長男の嫁として親の面倒をみることになり仕事を辞めました。まだ介護制度がないころで、大変なことも多々ありました。それも一段落して社会復帰することにしたのですが、40代の普通の女性には厳しい状況でした」

「働く女性にとって家事との両立がいかに大変なことか、これを手助けできれば、ハウスクリーニングやベビーシッターなど家事代行を始めたのがきっかけでした。家庭の困り事の相談に乗る、時間に余裕のある人が面倒をみるような助け合いグループでした。そんな中で皆さんが悩んでいたのは親の介護問題でした。私自身も苦労した経験を生かして、家事援助の延長で介護支援も始めました。まだ国の介護制度が始まる前のことです」

―それから介護事業を本格的に手掛けてきたそうですね。

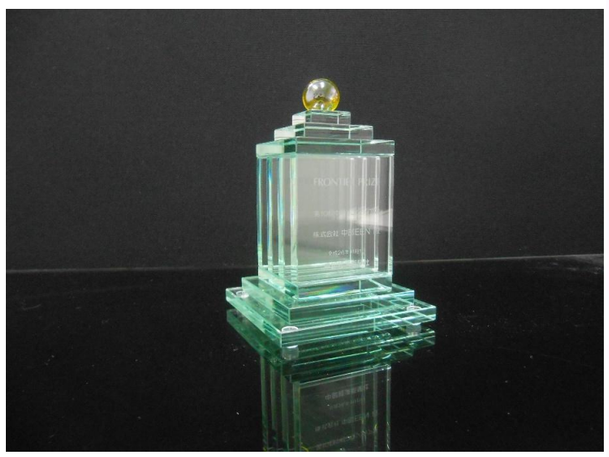
「指定事業所の資格を取り事業化する際にNPO法人の選択もありましたが、自由と責任をもってできる会社組織にしました。介護事業だけなく、女性の視点を生かして、女性の働く場をつくり、生まれ育った羽島地域に貢献するという強い志をもっていましたから。とは言え、まだ介護ビジネスの創成期で、大手企業や病院などバックを持たない零細な民間企業はなかなか受け入れてもらえません。金融機関からも相手にされずといって案底に資金をかけることはしたくありませんでした。地元会議所の支援を受けて開設することができました」

―今では介護事業を中心に幅広く事業展開されています。

「女性の目線と経験を生かしたサービスが評価され、また女性スタッフに恵まれたことが大きいですね。訪問介護からデイサービスやグループホーム、一昨年には有料老人ホームも開設しました。年中無休体制の総合的な事業展開ができるようになりましたが、地域に必要とされるサービスを手がけるために、事業拡大が目的ではありません」

「今年で創業16年を迎えましたが、『寄り添う介護　思いやりをカタチに』、『女性の特性を生かし、お互いに支えあう地域づくり』という経営理念に変わりはありません。今後も人材育成とともに地域に密着したサービスに力を注いでいきます」

女性の特性と経験を生かす

寄り添う介護　思いやりカタチに

☆第10回中経フロンティア賞